

様式 (6)

学 位 審 査

学 位 番 号	乙 第 2862 号	氏 名	金子 由紀
審 査 委 員 会	主 査 教 授	亀岡 信悟	
<p>論文審査の要旨 (400 字以内)</p> <p>論文のタイトルは「大腸癌原発巣における 5-FU (5-fluorouracil) 関連酵素発現量の意義」である。【目的】5-FU の代謝酵素の TS、DPD、OPRT 腫瘍内発現と病理学的因子や予後との関連に一定の見解は得られていない。今回レーザーマイクロダイセクション法とリアルタイム PCR 法により各酵素の mRNA 発現量の測定を行い、病理学的因子や予後との関連を明らかにした。【対象と方法】大腸癌手術症例 52 例を対象とし、原発巣の各酵素の mRNA 発現量を測定し、病理学的因子及び術後 5 年時点の予後との関連について統計学的に検討した。【結果】DPD、OPRT mRNA 発現量は病理学的因子と関連はなかった。TS mRNA 発現量は高悪性度の低分化型で高く、進行度が高度のリンパ管侵襲高度、静脈侵襲陽性、漿膜浸潤陽性、臨床病期進行例で低発現であった。術後 5 年時点の再発の有無で再発群の TS mRNA 発現量が低かった。多変量解析では壁深達度及びリンパ節転移が有意な再発因子であり TS mRNA 発現量は選択されなかった。再発群で TS mRNA 発現量の高低では生存率に差は認めなかった。【考察と結果】TS mRNA 発現量は独立した再発予後因子とならないと考えられた。TS mRNA 発現量は高発現で予後不良と考えられているが、今回の結果では高悪性度では高発現で進行に伴い低発現となると考えられた。TS mRNA 発現量と予後との関連の評価には進行に伴う TS mRNA 発現量の変化を考慮すべきである。</p> <p>以上、この研究は臨床的に価値があり、優れた論文である。</p> <p>本要旨は当該論文が第二次審査に合格した後の 1 週間以内に学務部医学部大学院課へご提出下さい。(本学学会雑誌に公表) [学校教育法学位規則第 8 条]</p>			